

差別のない平等な社会

小 六

ある日、駅に行つたときの出来事です。

小学一、二年生ぐらいの男の子がベビーカーのようなものに乗って、お母さんに押されていました。「こんなに大きいのにベビーカーに乗るなんて、はずかしくないのかな。」と思いましたが、たかさんの人が、男の子を見てざわついていました。男の子は下を向いたまま、乗り場へのエレベーターにお母さんに押されて乗っていきました。私は、母と階段で乗り場へのぼっていきました。

階段をのぼり、乗り場へ着くとベビーカーのようなものに乗った男の子とお母さんが電車を待っていました。その時

間帯はちょうど会社や学校から帰る人が乗るので、とても混雑していました。やがて混雑している電車が来て、男の子とお母さんはその電車に乗ろうとしました。すると駅員さんが来て、

「ベビーカーは大変危険ですので、たまたんで乗車いただけますか。」

と言いました。しかし、駅員さんに言われても二人は下を向いたまま何も言いませんでした。そうしているうちに、電車はドアが閉まり、行ってしまいました。私は、乗るのは次の電車なので心配はないのですが、「いくらなんでも乗れないのはかわいそうだな。」と心の奥底で思いました。

「次の電車をお待ちください。」

駅員さんに言われ、

「バスで行こうか。」

とお母さんが言いました。私はその男の子をよく見てみました。すると、足がないのです。足の上に毛布をおいていたので、分かりませんでした。ベビーカーだと思っていたものは、車いすだったので。あんなことを思ってしまった自分が情けなく思いました。エレベーターを待つ二人をただ見つめるしかできませんでした。きつと駅員さんも大きい子供がただ樂をしたくてベビーカーに乗っていると買ったのでしよう。また、混雑していて仕事の手いっぱいで気が付かなかったのでしょう。二人はエレベーターを待っている間、こんなことを話していました。

「なんでぼくは電車に乗ったらいけないの？　なんでぼくには足がないの？　ぼくだって人間だよ。なんでぼくはみ

んなといっしょじゃないの？」

「仕方ないよ。こういう世の中だから。がまんしてね。」

私は胸が苦しくなりました。「同じ人間なのに、なぜ平等じゃないのだろう。」
「もっと早く気付いて、勇気を出して言っていれば、あの二人はいやな思いをせずに電車に乗れたかもしれない。」二人はエレベーターに乗って去っていきましました。

家に帰った後も、男の子とお母さんの会話が頭からはなれませんでした。このことを母と話しました。

「今の車いすはとてもおしやれでベビーカーのようなものがあるから気を付けて見ないとね。電車のダイヤと、危険性ばかり注意して気配りできなかったんだね。」

と母は言いました。「今からでも、相手の立場になって勇気をもつて心配りできる人間になりたい。」と母の話を聞いて思いました。

私たちは、障害のある人がどのように日常生活を送っているかに、もっと関心をもつべきです。人間は平等で、眼鏡をかけたたり、歯をきょう正したりするのと同じように、一人一人に何かしら病気や身体の障害があるんだと常に思いながら人と接すれば、差別のない平等な社会になっていくだろうと思います。